

第 19 章

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの降誕

第 1 節

सूत उवाच

महीपतिस्त्वथ तत्कर्म गर्ह्यं
विचिन्तयन्नात्मकृतं सुदुर्मनाः ।
अहो मया नीचमनार्यवत्कृतं
निरागसि ब्रह्मणि गूढतेजसि ॥ १ ॥

sūta uvāca

*mahī-patis tv atha tat-karma garhyam
vicintayann ātma-kṛtam sudurmanāḥ
aho mayā nīcam anārya-vat kṛtam
nirāgasi brahmaṇi gūḍha-tejasi*

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *mahī-patiḥ*—王; *tu*—しかし; *atha*—こうして (家に戻る途中) ; *tat*—その; *karma*—行為; *garhyam*—忌まわしい; *vicintayan*—そのように考えている; *ātma-kṛtam*—彼自身によって為されて; *su-durmanāḥ*—非常に意気消沈して; *aho*—ああ; *mayā*—私によって; *nīcam*—極悪な; *anārya*—野蛮な; *vat*—~のような; *kṛtam*—して; *nirāgasi*—過失のない者に; *brahmaṇi*—ブラーフマナに; *gūḍha*—重大な; *tejasi*—その力強い者に。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「王 (マハーラージャ・パリークシット) は宮殿への道すがら考えていた——なんの欠点もなく、あの力みなぎるブラーフマナにしたことは極悪非道としか言えない、と。そのためかれは沈みきっていた」

要旨解説

敬虔なパリークシット王は、あの力強い、そしてなにも悪いことをしたわけでもないブラーフマナに対してたまたましてしまった不適切な仕打ちを後悔しています。そのような悔いは、かれのような謙虚な人物には自然なことであり、だからこそそのきもちが、偶然だとしても犯してしまった罪から献愛者を救ってくれるのです。献愛者はもともと欠点のない人たちです。

献愛者が偶然に犯してしまう罪は誠実に悔やまれますし、主の恩寵もてつだって、献愛者によってなされたすべての罪はどれも後悔という火で焼きつくされるのです。

第2節

ध्रुवं ततो मे कृतदेवहेलनाद्
दुरत्ययं व्यसनं नातिदीर्घात् ।
तदस्तु कामं ह्यघनिष्कृताय मे
यथा न कुर्यां पुनरेवमद्धा ॥ २ ॥

*dhruvaṃ tato me kṛta-deva-helanād
duratyayaṃ vyasanam nāti-dīrghāt
tad astu kāmam hy agha-niṣkṛtāya me
yathā na kuryāṃ punar evam addhā*

dhruvam—確実に間違いない; *tataḥ*—だから; *me*—私の; *kṛta-deva-helanāt*—主の命令を無視したため; *duratyayam*—非常に困難な; *vyasanam*—大災難; *na*—～ではない; *ati*—非常に; *dīrghāt*—はるかかなた; *tat*—それ; *astu*—そうなるように; *kāmam*—心の底から望む; *hi*—確かに; *agha*—罪; *niṣkṛtāya*—自由になるために; *me*—私の; *yathā*—そうすることで; *na*—決して～ない; *kuryām*—私がそれをするように; *punaḥ*—再び; *evam*—私がしたように; *addhā*—直接。

(パリークシット王は考えた)「至高主の教えをないがしろにしてしまった私は、近い将来、必ずなにかの困難な状況に落とされるはずだ。いま私は大きな不幸がやってくることを心から望む。そうであってこそ、あの罪を行ないから解放され、そして同じまちがいを繰り返さないのだ」

要旨解説

至高主は、ブラーフマナと牛は必ず守られなくてはならない、と命じています。主本人が、ブラーフマナと牛のために良いことをしたいと強く願っています (*go-brāhmaṇa-hitāya ca*)。マハーラージャ・パリークシットはもちろんそのことをよく知っていましたし、だから力強いブラーフマナを冒瀆してしまったことで主の法則によって必ず罰せられるし、近い将来、なにか大きな困難が自分に起こることを予想していました。そしてなにかさせまった大災難が家族ではなく自分に起こることを望んでいます。一人の人間のまちがった行為がその家族全員に

悪い影響を及ぼすものです。ですからマハーラージャ・パリークシットは、自分だけに災難が起こることを望んでいるのです。自分だけが苦しむことで、さらなる罪が抑えられるし、同時に自分が犯してしまった罪は打ちけされ、自分の子孫が苦しむことはありません。責任感ある献愛者はそう考えるものです。献愛者の家族も、その献愛者の主への献愛奉仕の結果を分かち合うことができます。マハーラージャ・プラフラダは自分の献愛奉仕によって、悪魔の父親を救いました。家族内の献愛者の息子は、最大の恩恵、あるいは主からの祝福です。

第3節

अद्यैव राज्यं बलमृद्धकोशं
प्रकोपितब्रह्मकुलानलो मे ।
दहत्वभद्रस्य पुनर्न मेऽभूत्
पापीयसी धीर्द्विजदेवगोभ्यः ॥ ३ ॥

*adyaiva rājyaṁ balam ṛddha-kośam
prakopita-brahma-kulānalo me
dahatv abhadrasya punar na me 'bhūt
pāpīyasī dhīr dvija-deva-gobhyaḥ*

adya—この日; *eva*—まさしくそのことで; *rājyam*—王国; *balam ṛddha*—力と富; *kośam*—宝庫; *prakopita*—～に燃やされて; *brahma-kula*—ブラーフマナ社会によって; *analaḥ*—火; *me dahatu*—私を焼きつくすように; *abhadrasya*—不吉な; *punaḥ*—再び; *na*—～ではない; *me*—私に; *abhūt*—起こるように; *pāpīyasī*—罪深い; *dhīḥ*—知性; *dvija*—ブラーフマナ達; *deva*—至高主; *gobhyaḥ*—そして牛。

私は、ブラーフマナの文化、神の意識、牛の保護をないがしろにするような野蛮で罪深い男だ。だから私の国、力、富がすべて、ブラーフマナの怒りの火で焼きつくされることを望む。将来、私がこのような不吉なふるまいを繰り返さないためにも。

要旨解説

発展的な人類文化は、ブラーフマナ文化、神の意識、牛の保護に支えられています。商業、貿易、農業、工業による国の経済発展は、この原則にもとづいて利用されるべきであり、それができなければ、たとえ経済が発展しても社会を墮落させるばかりです。牛を守る、とは、神

の意識に人々を導くブラーフマナ文化を育てるという意味であり、それができれば完璧な人間文化が築かれます。カリ時代は高尚な生活原則を滅ぼすための時代であり、マハーラージャ・パリークシットが世界にカリの権化がはびこることに頑強に抵抗したあとでも、カリ時代の影響はその機が熟したときに現われ、マハーラージャ・パリークシットほどの屈強な王でさえわずかな飢えと渴きに挑発され、ブラーフマナ文化を軽視してしまったのです。パリークシット王はその偶発的な一連の出来事を嘆き、自分の王国、力、富の蓄積もブラーフマナ文化をないがしろにした罰として焼きつくされればいい、と考えています。

富や力がブラーフマナ文化の高揚、神の意識、牛の保護のために使われなければ、その国も家庭も神の意志で滅んでいきます。世界に平和と繁栄を望むのであれば、私たちはこの節から学び取らなくてはなりません。すべての国、すべての家庭は、自己を浄化させるブラーフマナ文化、自己を悟るための神の意識、そして完璧な文化を維持する最善の食糧である牛乳を得るための牛の保護のために努力しなくてはなりません。

第4節

स चिन्तयन्नित्थमथाशृणोद् यथा
 मुनेः सुतोक्तो निर्ऋतिस्तक्षकाख्यः ।
 स साधु मेने नचिरेण तक्षका-
 नलं प्रसक्तस्य विरक्तिकारणम् ॥ ४ ॥

sa cintayann ittham athāśṛṇod yathā
 muneḥ sutokto nirṛtiḥ takṣakākhyah
 sa sādhu mene na cireṇa takṣakā-
 nalam prasaktasya virakti-kāraṇam

saḥ—彼、王; cintayan—考えている; ittham—このように; atha—今; aśṛṇot—聞いた; yathā—～として; muneḥ—聖者の; suta-uktaḥ—息子によって語られた; nirṛtiḥ—死; takṣaka-ākhyah—蛇鳥と関連して; saḥ—彼（王）; sādhu—良いこと; mene—受け入れた; na—～ではない; cireṇa—非常に長い時間; takṣaka—蛇鳥; analam—火; prasaktasya—過度に執着している者にとって; virakti—無関心; kāraṇam—原因。

王がこのように悔やんでいたとき、聖者の息子が放った呪いの言葉が具体化し、やがて蛇鳥に噛まれて死ぬという知らせが届いた。王はこれを吉報と受けとめた。世俗の物事に対して無

関心になれる機会として捉えたからである。

要旨解説

ほんとうの幸せは、精神的な境地で、あるいは誕生と死の繰り返しを終わらせることで得られます。その誕生と死の繰り返しは、神のもとに帰るだけで止めることができます。物質界では、頂点の惑星（ブラフマローカ）に到達しても、誕生と死の繰り返しから抜け出すことはできませんが、それでも人々は完璧な境地を得る道を受け入れようとしません。完璧な境地に辿りつく道を歩けば、私たちはすべての物質的執着から解放され、やがて精神的な国に入るにふさわしい質を得ることができます。ですから、極貧状態にいる人こそ、物質的に恵まれている人よりも解放されるにふさわしいと言えます。マハーラージャ・パリークシットは主の偉大な献愛者でしたし、神の国に入るにふさわしいほんものの候補者ではありましたが、世界の皇帝という物質的利点は、精神界で主の交流者の一人になるという完璧な境地に到達する妨げになっていました。主の献愛者だったかれは、ブラーフマナの少年の呪いを賢いものがすることとは思いませんでしたが、結果的に政治と社会から身を引くことになったのですから、自分に対する祝福として考えました。シャミーカ・ムニも起こってしまったことを嘆きはしましたが、王が神のもとに帰る準備ができるように、自分の義務として王にすべてを伝えました。シャミーカ・ムニは王に伝えました——愚かな、そして我が子でもあるシュリングはたしかに力をそなえたブラーフマナだったけれども、精神的な力を誤用し、まちがった方法で王を呪ってしまった。蛇の屍をぶらさげた王の行為は、死んでつぐなうほどの冒涇ではなかったけれども、呪いを破棄するすべはなかったため、王は1週間以内に死ぬ準備をしなくてはならない——と。シャミーカ・ムニと王はどちらも自己を悟った魂です。シャミーカ・ムニは神秘主義者、マハーラージャ・パリークシットは献愛者。ですから、二人の自己の悟りに違いはありません。どちらも死を恐れていなかったのです。マハーラージャ・パリークシットはムニを訪ねて謝罪することはできましたが、ムニが深く後悔し、その思いで、死は避けられないことを自分に伝えてきたのですから、かれのまえに姿を見せればムニに恥をかかせることになる、と考えました。ですから、死を受け入れよう、そして神のもとに帰るそなえをしよう、と決心しました。

人の一生は神のもとに帰る機会、あるいは物質存在から、すなわち誕生と死の繰り返しから抜け出す機会です。ですから、ヴァルナーシュラマ・ダルマには、すべての男女がその目標を達成するために訓練を受けます。言いかえれば、ヴァルナーシュラマ・ダルマ制度は、サナータナ・ダルマ、つまり永遠の本務としても知られているということです。ヴァルナーシュラマ・ダルマは私たちが神のもとに帰っていく心がまえを持つよう導き、そして世帯者はヴァー

ナプラスタとして森に入り、完璧な知識を身につけ、必ず直面する死のまえにサンニャーサを受け入れるよう命じています。パリークシット・マハーラージャは、7日以内に死に直面することを告げられました。しかしふつうの人々にとって、死は避けられないとはわかっていても、確かな日にちはわかりません。愚かな人々は、必ず死ぬという事実を忘れ、神のもとに帰るそなえもすることはありません。そして、食べ、飲み、そして愉快地暮らすという動物まがいの生活をし、生涯を無駄にしてしまうのです。カリ時代の人々はそのような無責任な生活に埋もれていますが、それはブラーフマナ文化、神の意識、牛の保護を非難する罪な望みがそうさせているのであり、その責任は国が負うことになります。国はこの3つの項目を高めるための収入源を確保すべきであり、そうすれば人々は死にそなえることができるようになります。それができる国こそ、ほんとうの福祉国家です。インドは、人間生活の窮極目標である神の国についてなにも知らない物質主義的な国々をまねるよりも、理想的な行政長官であるマハーラージャ・パリークシットの例に従わなくてはなりません。インドが理想とする文化が衰退すれば、インドはもとより、外国でも文化的な生活は衰退していくのです。

第5節

अथो विहायेमममुं च लोकं
 विमर्शितौ हेयतया पुरस्तात् ।
 कृष्णाङ्घ्रिसेवामधिमन्यमान
 उपाविशत् प्रायममर्त्यनद्याम् ॥ ५ ॥

*atho vihāyemam amum ca lokam
 vimarśitau heyatayā purastāt
 kṛṣṇāṅghri-sevām adhimanyamāna
 upāviśat prāyam amartya-nadyām*

atho—こうして; *vihāya*—捨て去っている; *imam*—これ; *amum*—そして次; *ca*—もまた; *lokam*—惑星; *vimarśitau*—判断されたすべてのもの; *heyatayā*—劣っているため; *purastāt*—上に; *kṛṣṇa-āṅghri*—主、シュリー・クリシュナの蓮華の御足; *sevām*—超越的な愛情奉仕; *adhimanyamānaḥ*—すべての達成の中の最大の達成を考える者; *upāviśat*—堅く座った; *prāyam*—絶食のために; *amartya-nadyām*—超越的な川（ガンジス川あるいはヤムナー川）のほとりで。

マハーラージャ・パリークシットは、クリシュナ意識に心を専念させるため、自己の悟りの

ためにあるすべての方法を捨て、ガンジス川のほとりにしっかりと座った。クリシュナへの超越的な愛情奉仕こそが、他のすべての方法に優る最高の達成だからである。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットのような献愛者にとって、物質界の惑星は、たとえ頂点にあるブラフマローカであっても、太古の主、根源の人格主神・主クリシュナシュリー・クリシュナの惑星であるゴーローカ・ヴリンダーヴァナに比べれば、目ざすべき場所ではありません。地球は、宇宙にある無数の物質惑星の一つであり、さらにマハトウ・タットヴァのなかには無数の宇宙が存在しています。献愛者は、主と主の代表者、すなわち精神指導者あるいはアーチャーリヤから「無数の宇宙にある惑星はどこも献愛者が住むにはふさわしくない」と教わっています。献愛者はいつも、ふるさとに、神のもとに帰りたいと願っていますが、それは、無数のヴァイクンタ惑星の一つ、あるいは主シュリー・クリシュナの惑星であるゴーローカ・ヴリンダーヴァナで、召使い、友人、両親、あるいは主の恋人という立場で主との交流者の一人になるためです。これらの惑星はすべて、精神界・パラヴォーマに永遠に位置されており、そこは、マハトウ・タットヴァ内にある「原因の海」の反対側にあります。マハーラージャ・パリークシットは、これまで積み重ねた敬虔な行ない、そしてヴァイシュナヴァという高貴な献愛者家系に生まれたことで、このような情報はすでに知っていましたから、物質惑星にはなんの関心もありませんでした。現代科学者は、機械を使った物質的な方法で月に行こうとしていますが、この宇宙の頂点にある惑星のことなど想像さえできません。しかし、マハーラージャ・パリークシットのような献愛者にとって、月のこと、いいえ、物質界など眼中にありません。ですから、この日までに死ぬ、とつきつけられたとき、ハスティナープラ（デリー）の都市を流れる超越的なヤムナー川の岸辺で食を絶つことで、主への超越的な愛情奉仕に対する決意をさらに強めました。ガンジス川もヤムナー川もアマルテャー (*amartyā*・超越的) な川であり、ヤムナー川は次の理由で、より崇高な神聖な質に満ちています。

第6節

या वै लसच्छ्रीतुलसीविमिश्र-
कृष्णाङ्घ्रिरेण्वभ्यधिकाम्बुनेत्री ।
पुनाति लोकानुभयत्र सेशान्
कस्तां न सेवेत मरिष्यमाणः ॥ ६ ॥

yā vai lasac-chrī-tulasī-vimiśra-
kṛṣṇāṅghri-reṇv-abhyadhikāmbu-netrī
punāti lokān ubhayatra sesān
kas tām na seveta mariṣyamāṇaḥ

yā—～であるその川; vai—いつも; lasac—～と共に浮かんでいる; śrī-tulasī—トラシーの葉; vimiśra—混ぜ合わされて; kṛṣṇa-aṅghri—主、シュリー・クリシュナの蓮華の御足; reṇu—埃; abhyadhika—吉兆な; ambu—水; netrī—～を運んでいるもの; punāti—神聖化する; lokān—惑星; ubhayatra—上下、あるいは内外の; sa-iśān—主シヴァと共に; kaḥ—ほかの誰か; tām—その川; na—～しない; seveta—崇拜する; mariṣyamāṇaḥ—いつ何時でも死ぬ者。

その川（王が絶食のために座ったガンジス川）は、主の蓮華の御足につく埃とトラシーの葉が混ざり合った吉兆な水となって流れていた。ゆえに、その水は三界の内も外も、主シヴァやほかの半神たちでさえも神聖化していた。したがって、死ぬ定めにある者はだれでも、この川に保護を求めなくてはならない。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットは、7日以内に死ぬという知らせを受けとったあと、すぐに家族生活から離れ、ヤムナー川の神聖な岸边に向かいました。通説ではパリークシットはガンジス川の岸边に身をゆだねたと言われていますが、シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーの見解では、その場所はヤムナー川だとされています。地理的状況を考慮すると、シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーの説のほうがより正確と考えられています。マハーラージャ・パリークシットは当時ハスティナープラに住み、それは現在のデリー付近であり、ヤムナー川はその都市のなかを流れています。王は宮殿のすぐまえを流れるヤムナー川を選んだ、と考えるのが自然です。また神聖化させる力については、ヤムナー川はガンジス川よりも主クリシュナと直接に関係している点が挙げられます。主は、この世界で崇高な娯楽を始めたときから、ヤムナー川を神聖化しています。父ヴァスデーヴァが、ゴークラという安全な場所を求めて赤ん坊の主クリシュナを抱き、マトウラー側からヤムナー川をわたろうとしていたとき、主は川のなかに落ちましたが、その瞬間にヤムナー川は主の蓮華の御足の埃によって神聖になりました。この節で特に述べられているように、マハーラージャ・パリークシットは、トラシーの葉がついている主クリシュナの蓮華の御足の埃を含んで美しく流れるその川に身をゆだねました。主クリシュナの蓮華の御足にはいつもトラシーの葉がついているため、主の蓮華の御足がガン

ジス川やヤムナー川の水と触れると、どちらもすぐに神聖化されるのです。しかし主は、ガンジス川よりもヤムナー川と強いつながりを持っています。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーが『ヴァラーハ・プラーナ』の言葉を引用しているように、水そのものはガンジス川もヤムナー川も違いはありませんが、ガンジス川の水が100倍神聖化されると、それがヤムナー川と呼ばれる、とされています。同じように、他の経典では、ヴィシュヌの名前を1,000回唱えることはラーマの名前を1回唱えることに等しく、主ラーマの名前を3回唱えることはクリシュナの名前を1回唱えることに等しい、とされています。

第7節

इति व्यवच्छिद्य स पाण्डवेयः
 प्रायोपवेशं प्रति विष्णुपद्याम् ।
 दधौ मुकुन्दाङ्घ्रिमनन्यभावो
 मुनिव्रतो मुक्तसमस्तस्राः ॥ ७ ॥

*iti vyavacchidya sa pāṇḍaveyaḥ
 prāyopaveśam prati viṣṇu-padyām
 dadhau mukundāṅghrim ananya-bhāvo
 muni-vrato mukta-samasta-saṅgaḥ*

iti—こうして; *vyavacchidya*—決心して; *saḥ*—その王; *pāṇḍaveyaḥ*—パーンダヴァ兄弟にふさわしい子孫; *prāya-upaveśam*—死ぬまで絶食するために; *prati*—～に向けて; *viṣṇu-padyām*—(主ヴィシュヌの蓮華の御足から流れ出している) ガンジス川の岸辺で; *dadhau*—みずからを投げだした; *mukunda-aṅghrim*—主クリシュナの蓮華の御足に; *ananya*—逸れることなく; *bhāvaḥ*—精神; *muni-vrataḥ*—聖者の誓いと共に; *mukta*—～から解放されて; *samasta*—あらゆる種類の; *saṅgaḥ*—交流。

パーンダヴァ兄弟の子孫としてふさわしい王は、ガンジス川の岸辺に座って死ぬまで絶食することを堅く決意し、解放を授ける唯一の方である主クリシュナの蓮華の御足にみずからを捧げた。こうして、あらゆる俗世とのつながりと執着すべてから離れ、聖者の誓いを受け入れた。

要旨解説

ガンジス川の水は、神も神々も含んだ三界全体を浄化します。その水が人格主神ヴィシュヌ

の蓮華の御足から流れ出しているからです。主クリシュナはヴィシュヌ・タットヴァの源ですから、その蓮華の御足は、王によって犯されたブラーフマナに対する冒瀆を含むどのような罪からでも救います。ですからマハーラージャ・パリークシットは、あらゆる種類の解放を授けてくれる主シュリー・クリシュナの蓮華の御足を瞑想する決意をしました。ガンジス川、あるいはヤムナー川のほとりは、主をいつも思う機会を提供してくれます。マハーラージャ・パリークシットはいっさいの物質的かかわりから身を引き、主クリシュナの蓮華の御足を瞑想しましたが、それこそが解放への道です。物質的な関係を絶つのは、それ以上罪を犯さないことを指しています。そして、主の蓮華の御足を瞑想するのは、昔の罪の結果から解放されることを指しています。物質界は、知りつつ、あるいは知らないうちに罪を犯してしまう世界であり、その一番いい例が、罪のない、敬虔な王と認められていたマハーラージャ・パリークシット自身です。そのようなまちがいを犯すきもちはまったくなかったかたでしたが、冒瀆の犠牲になってしまいました。そしてその結果として呪われましたが、主の偉大な献愛者だったことから、そのような苦境でさえやがて好都合な状況に変わりました。生きているかぎり罪は犯さない、と思ふべきであり、そのためにも、逸れることなく主の蓮華の御足を思っていることが大切です。そのような思いを持つ献愛者には必ず主が救いの手をさしのべ、解放に向かう道を着実に進めるよう導き、やがてその献愛者は主の蓮華の御足に辿りつきます。献愛者が思いがけず罪を犯してしまったとしても、主は身をゆだねた魂をあらゆる罪から救ってくれるのであり、そのことが経典のなかで次のように確証されています。

*sva-pāda-mūlaṁ bhajataḥ priyasya
 tyaktāny abhāvasya hariḥ pareśaḥ
 vikarma yac cotpatitaṁ kathañcid
 dhunoti sarvaṁ hṛdi sanniviṣṭaḥ*

『シュリーマド・バーガヴァタム』（第11編・第5章・第42節）

第8節

तत्रोपजग्मुर्भुवनं पुनाना
 महानुभावा मुनयः सशिष्याः ।
 प्रायेण तीर्थाभिगमापदेशैः
 स्वयं हि तीर्थानि पुनन्ति सन्तः ॥ ८ ॥

tatropajagmur bhuvanam punānā
mahānubhāvā munayaḥ sa-śiṣyāḥ
prāyeṇa tīrthābhigamāpadeśaiḥ
svayaṁ hi tīrthāni punanti santaḥ

tatra—そこに; upajagmuḥ—到着した; bhuvanam—宇宙; punānāḥ—神聖化できる者達;
mahā-anubhāvāḥ—偉大な心; munayaḥ—思想家達; sa-śiṣyāḥ—彼らの弟子達と共に; prāyeṇa—ほ
とんど; tīrtha—巡礼の場所; abhigama—旅; apadeśaiḥ—～を口実に; svayam—個人的に; hi—確か
に; tīrthāni—巡礼の場所すべて; punanti—神聖化する; santaḥ—聖者達。

そのとき、弟子たちをともなった偉大な心の持ち主や思想家たち、さらにただ居るだけで巡
礼を神聖化させられる聖者たちが、巡礼の旅と称してその場に終結してきた。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットがガンジス川の岸辺に座ったとき、その知らせは宇宙全体
に広まり、この出来事の重大さがわかった偉大な心の聖者たちが、巡礼を口実に集まってきま
した。巡礼地で沐浴するためではなく、じつはマハーラージャ・パリークシットに会いに来た
のでした。かれら自身が巡礼地を神聖化する力をそなえているのですから。大衆は巡礼地に集
まり、それまでの罪をそこですべて捨てて帰りたいと思っています。ですから、巡礼地にはそ
ういう人々の罪が充満しています。しかしこのような聖者が、罪でいっぱいになった巡礼地
に行くと、聖者の存在そのものがその場所を浄化させます。ですから、マハーラージャ・パリー
クシットに会いにきた聖者たちは、大衆とはちがって、自分たちを浄化させることには関心が
なく、沐浴をするという口実でその場所に来てマハーラージャ・パリークシットに会うつもり
でした。かれらは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって『シュリーマド・バーガヴァ
タム』が語られるだろう、ということが予見できたのです。かれら自身が、この素晴らしい出
来事から恩恵を授かりたいと思っていたのでした。

第 9 - 1 0 節

अत्रिर्वसिष्ठश्च्यवनः शरद्वा-
नरिष्टनेमिर्भृगुरारिराश्च ।
पराशरो गाधिसुतोऽथ राम
उतथ इन्द्रप्रमदेध्मवाहौ ॥ ९ ॥

मेधातिथिदेवल आर्षिषेणो
भारद्वाजो गौतमः पिप्पलादः ।
मैत्रेय और्वः कवषः कुम्भयोनि-
द्वैपायनो भगवान्नारदश्च ॥ १० ॥

*atrir vasiṣṭhaś cyavanaḥ śaradvān
ariṣṭanemir bhṛgur aṅgirās ca
parāśaro gādhi-suto 'tha rāma
utathya indrapramadedhmavāhau*

*medhātithir devala ārṣiṣeṇo
bhāradvājo gautamaḥ pippalādaḥ
maitreya aurvaḥ kavaṣaḥ kumbhayonir
dvaipāyano bhagavān nāradaś ca*

atri to nārada—宇宙の各地区から集結した神聖な人物たちの名前。

宇宙のさまざまな場所から聖者たちがこぞって集結してきた。アトゥリ、チャヴァナ、シャラドゥヴァーン、アリシュタネーミ、ブリグ、ヴァシシュタ、パラージャラ、ヴィシュヴァーミトウラ、アングラー、パラシュラーマ、ウタテヤ、インドラプラマダ、イドゥマヴァーフ、メーダーティティ、デーヴァラ、アールシュティシエーナ、バーラドゥヴァーージャ、ガウタマ、ピッパラーダ、マイトウレーヤ、アウルヴァ、カヴァシャ、クンバヨーニ、ドゥヴァイパーヤナ、そして偉大な人物ナーラダたちである。

要旨解説

チャヴァナ ブリグ・ムニの息子の一人で、偉大な聖者。みごもっていた母が誘拐され、早産で生まれています。チャヴァナは父ブリグ・ムニがもうけた6人の子の一人です。

ブリグ ブラフマジーがヴァルナに代わって盛大な供儀祭を執行していたとき、マハルシ・ブリグが、その儀式の火から誕生しました。偉大な聖者であり、ひじょうに愛しい妻の名をプローマーといいます。ドゥルヴァーサやナーラダといった聖者と同じく、宇宙を飛びまわることができ、よくさまざまな惑星を訪ねていました。クルクシェートラの戦いがはじまるまえ、戦いを止めようとしています。ときに、バーラドゥヴァーージャ・ムニに、天文学上の進化論について説き、『ブリグ・サムヒター』という優れた占星術的計算書の著者でもあります。その

なかで、空気、火、水、土がどのように空間から作りだされたかを説明しています。また、胃腸内の空気がどのように機能し、腸を制御しているかについても説明しました。偉大な哲学者だったかれは、生命体の永遠性を理論的に確立しています（Mahābhārata）。また優れた人類学者でもあり、進化論についてはずっと昔から説明しています。ヴァルナーシュラマ制度として知られている人間社会の4つの区分と階級に関する科学的な学説を提示した人物でもあります。ヴィータハヴァという名のクシャトリア王をブラーフマナに変えたことがあります。

ヴァシシュタ 『シュリーマド・バーガヴァタム』（第1編・第9章・第6節）参照。

パラージャラ ヴァイシュシュタ・ムニの孫、そしてヴァーサデーヴァの父。マハルシ・シヤクティの子、母の名をアドウリッシャティーといいます。母がまだ12歳のころ、その胎内に宿りました。その胎内でヴェーダを学んでいます。父はカルマーシャパーダという悪魔に殺されたため、全世界を破壊して復讐しようとしていました。しかし祖父のヴァシシュタの助言で思いとどまり、次にラクシャサを殺害するヤギヤを執行しましたが、マハルシ・プラステヤに止められました。ヴァシシュタは、マハーラージャ・シャーンタヌの妻になるはずだったサッチャヴァティーに魅了され、かのじよとのあいだにヴァーサデーヴァをもうけました。パラージャラの祝福を得たサッチャヴァティーの体からは、数キロにまで漂うほどのかぐわしい香りが出ていました。かれはビーシュマが他界するときに居合わせています。マハーラージャ・ジャンカカ精神指導者であり、主シヴァの偉大な従者です。数多くのヴェーダ経典や社会学の指南書を著わしました。

ガーディ・スタ、別名ヴィシュヴァーミトウラ 苦行と神秘的力で高名な偉大な聖者。ガーディ・スタという名前でもよく知られていますが、それは父がガーディというカニャークブジャ（ウッタラ・プラデシュ）地方の強力な王だったことによります。クシャトリア王として誕生しましたが、精神的な力をきわめ、その体でブラーフマナになりました。クシャトリア王のときにヴァシシュタ・ムニに論争をしかけ、マタンガ・ムニと協力して盛大な儀式を執行し、ヴァシシュタの息子に打ち勝つことができました。偉大なヨーギーになりましたが、それでも感覚を抑えることができず、その結果、世界の歴史上たぐいまれな美女であるシャクンタラーをもうけました。クシャトリア王だったころ、ヴァシシュタ・ムニの庵を訪ね、壮大な歓迎式を受けます。ヴィシュヴァーミトウラはヴァシシュタからナンディニーという名前の乳牛をもらいうけたのですが、ムニはその申し出を断ります。ヴィシュヴァーミトウラはその牛を盗み、こうして聖者と王のあいだに争いが起こりました。ヴィシュヴァーミトウラはヴァシシュタの精神的力のまえに屈し、こうして王はブラーフマナになる決意をしました。ブラーフマナになるまえ、カウシカ川の岸辺で厳しい苦行に励みました。この人物も、クルクシェート

ラの戦いを止めようとしています。

アンギラー ブラフマーが心から誕生させた6人の息子の一人。天界の惑星に住む半神たちを司る偉大かつ博識な僧侶であるブリハスパティの父。火の灰に投げ入れられたブラフマーの精子から誕生しました。ウタチャとサンヴァルタはアンギラーの息子です。ガンジス川の岸辺であるアローカーナンダという場所で、いまでも苦行に励み、主の聖なる名前を唱えている、とされています。

パラシュラーマ 『シュリーマド・バーガヴァタム』(第1編・第9章・第6節) 参照。

ウタチャ マハルシ・アンギラーの3人の息子の一人。マハーラージャ・マンダーターの精神指導者です。ソーマ(月)の娘であるバドゥラーと結婚しました。ヴァルナがバドゥラーを誘拐し、水の神に侮辱された仕返しとして、世界中の水を飲み干しました。

メーダーティティ いにしえの年老いた聖者。インドラデーヴァ王が司る政府の議員の一人。かれの息子はカンヴァ・ムニで、森でシャクンタラーを育てました。引退生活(ヴァーナプラスタ)の原則に厳格に従ったことで天界の惑星に高められています。

デーヴァラ ナーラダ・ムニやヴァーサデーヴァに匹敵する偉大な権威者。その高名は、『バガヴァッド・ギーター』で、アルジュナが主クリシュナを最高人格主神として認めたときに挙げられた権威者のリストに含まれています。デーヴァラはクルクシェートラの戦いのあとにマハーラージャ・ユディシュティラと会っており、またパーンダヴァ家の僧侶であるダウミヤの兄にあたります。クシャトリヤとして、娘にスヴァヤンヴァラの試合で夫を選ぶことを許し、会場にはリシたちの独身男性たち全員が招かれました。権威者の見解では、この人物はアシタ・デーヴァラではないとされています。

バーラドゥヴァージャ 『シュリーマド・バーガヴァタム』(第1編・第9章・第6節) 参照。

ガウタマ 宇宙を代表する偉大な7人の聖者の一人。シャラドゥヴァーン・ガウタマはかれの息子の一人です。現代のガウタマ・ゴートウラ(王家)の人々は、ガウタマの子孫、そして師弟継承に属しています。ガウタマ・ゴートウラと公言するブラーフマナたちは、一般的にその家系に属しており、ガウタマ・ゴートウラを公言するクシャトリヤとヴァイシャは、師弟継承上に属する人々です。ガウタマは名高いアハリヤーの夫です。アハリヤーは、天界の王インドラに虐待されたとき自分の姿を石に変えました。アハリヤーは主ラーマチャンドラに救われています。ガウタマは、クルクシェートラの戦いの英雄の一人であるクリパーチャーリヤの祖父にあたります。

マイトウレーヤ いにしえの偉大なりシ。ヴィドゥラの精神指導者で、偉大な宗教権威者で

もあります。ドゥリタラーシュトラには、パーンダヴァ兄弟と良い関係を保つようつねづね助言をしていました。ドゥリヨーダナはそのことに反対し、その結果マイトゥレーヤに呪われました。ヴィドウラはヴァーサデーヴァに会い、宗教にまつわる会話を交わしています。

第 1 1 節

अन्ये च देवर्षिब्रह्मर्षिवर्या
राजर्षिवर्या अरुणादयश्च ।
नानार्षेयप्रवरान् समेता-
नभ्यर्च्य राजा शिरसा ववन्दे ॥ ११ ॥

*anye ca devarṣi-brahmarṣi-varyā
rājarṣi-varyā aruṇādayaś ca
nānārṣeya-pravarān sametān
abhyarcya rājā śirasā vavande*

anye—その他大勢の; *ca*—もまた; *devarṣi*—神聖な半神達; *brahmarṣi*—神聖なブラーフmana達; *varyāḥ*—頂点の; *rājarṣi-varyāḥ*—頂点の、神聖な王達; *aruṇa-ādayaḥ*—特別の階級のラージャルシ達; *ca*—そして; *nānā*—その他多くの; *ārṣeya-pravarān*—聖者達の王家の主要な者達; *sametān*—集結した; *abhyarcya*—崇拝することで; *rājā*—皇帝; *śirasā*—地面に頭を下げてお辞儀をした; *vavande*—歓迎した。

集まってきた人々のなかには、神聖な半神、王、さまざまな聖者の王家に属するアルナーダヤ（特別の階級にいるラージャルシ）と呼ばれる特別の王たちが含まれていた。かれらが皇帝（パリークシット）に会うために集結したとき、王は地面に頭をつけてひれ伏し、礼儀正しく迎えた。

要旨解説

目上の人物に敬意をしめすために地面に頭をつけてお辞儀をする作法は、迎えられた客人に心に深く榮譽を感じさせる優れた礼儀です。最悪の冒瀆を犯した者でさえ、この作法に従えば許されることがあり、マハーラージャ・パリークシットも、すべてのリシや王たちに讃えられている人物でありながら、冒瀆を犯したことを許してもらうために、つつましい礼儀作法で宇宙の偉人たちを迎え入れたのです。一般的に、思慮分別のある人は、生涯を終えて他界してい

くまえに、このように謝意をしめて許しを請います。マハーラージャ・パリークシットはこうして、ふるさとへ、神のもとへ帰っていくためにすべての人々の祝福を懇願したのでした。

第 1 2 節

सुखोपविष्टेष्वथ तेषु भूयः
कृतप्रणामः स्वचिकीर्षितं यत् ।
विज्ञापयामास विविक्तचेता
उपस्थितोऽग्रेऽभिगृहीतपाणिः ॥ १२ ॥

*sukhopaviṣṭeṣv atha teṣu bhūyaḥ
kṛta-praṇāmaḥ sva-cikīrṣitaṁ yat
vijñāpayām āsa vivikta-cetā
upasthito 'gre 'bhigrhīta-pāṇiḥ*

sukha—幸福に; *upaviṣṭeṣu*—全員が座っている; *atha*—そのすぐ後; *teṣu*—彼ら（訪問客）に; *bhūyaḥ*—再び; *kṛta-praṇāmaḥ*—お辞儀を捧げている; *sva*—彼自身の; *cikīrṣitaṁ*—絶食する決意; *yat*—～である者; *vijñāpayām āsa*—告げた; *vivikta-cetāḥ*—心が俗事に対して無執着である者; *upasthitaḥ*—居合わせて; *agre*—彼らの前で; *abhigrhīta-pāṇiḥ*—慎ましく合掌して。

王は、リシや他の客人たちに心地よく座ってもらったあと、つつましくかれらのまえに合掌して立ち、死ぬまで絶食することにした経緯を話した。

要旨解説

王は、ガンジス川のほとりで死ぬまで絶食することをすでに決めていましたが、居合わせた偉大な権威者たちの意見を伺うために自分の決意を表明しています。決定というものは、どれほど重要なものであっても、権威によって認められなくてはなりません。それでこそ、申し分のない状況を作りだすことができます。言いかえれば、当時世界を治めていた君主は、無責任は指導者ではなかった、ということです。ヴェーダの教えにもとづいた聖人や聖者の権威ある決定に正直に従っていたのです。マハーラージャ・パリークシットは完璧な王でしたから、権威者に相談することで、生涯を閉じる日々まで、その原則に従いました。

第 1 3 節

राजोवाच

अहो वयं धन्यतमा नृपाणां
महत्तमानुग्रहणीयशीलाः ।
राज्ञां कुलं ब्राह्मणपादशौचाद्
दूराद् विमुष्टं बत गर्ह्यकर्म ॥ १३ ॥

rājovāca

aho vyaṁ dhanyatamā nṛpāṇām
mahattamānugrahaṇīya-śilāḥ
rājñām kulam brāhmaṇa-pāda-śaucād
dūrād viśṣṭam bata garhya-karma

rājā uvāca—幸運な王が言った; aho—おお; vyaṁ—私達; dhanya-tamaḥ—もっとも感謝に満ちた; nṛpāṇām—すべての王達の; mahat-tama—偉大な魂達の; anugrahaṇīya-śilāḥ—恩寵を得るために訓練されて; rājñām—王室の; kulam—階級; brāhmaṇa-pāda—プラーフマナ達の御足; śaucāt—掃除したあとに拒否する; dūrāt—遠方に; viśṣṭam—いつも除外されて; bata—～の理由で; garhya—非難されるべき; karma—活動。

幸運な王が言う。「まさに私たちは、偉大な魂たちから恩寵を授かる訓練を受けた王たちのなかでもとくに感謝の念に打たれている王です。一般的に、あなたがた（聖者）は、王族とは拒否されるべきもの、そして遠くに避けるべきものと考えておられます」

要旨解説

宗教原則によると、糞、尿、洗い水などは遠くに避けておくべきもの、とされています。屋内のトイレ、小便器などは、現代文化ではとても便利な設備とされているかもしれませんが、じつは居住区からは遠くに設置されていなければなりません。その同じ例が、神のもとに帰ろうと励んでいる人々と王族階級との関係で述べられています。主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブは、金中心の人間、あるいは王族との親密なつながりを持つことは、神のもとに帰る望みを者には自殺より忌まわしいものである、と言いました。これは言いかえると、超越主義者は、神の創造物という表面的な美しさに完全に心奪われている人々とはかかわらない、ということです。精神的かつ高尚な知識をそなえる超越主義者は、美しく見えるこの物質界は、

真実の世界、すなわち神の王国の影にすぎないことをよく知っています。かれらは、王室の富やそのたぐいの財宝に魅了されているわけではありませんでした。しかしマハーラージャ・パリークシットの場合は事情が違います。一見したところ、王は未熟なブラーフマナの少年に呪われはしましたが、じつは主に戻るよう呼ばれていたのです。だから、マハーラージャ・パリークシットが死ぬまで絶食するから、と集まってきたほかの超越主義者、偉大な聖者、神秘主義者たちは、王が神に戻っていく様子を見たくてたまらなかつたのです。マハーラージャ・パリークシットは、集まってきた偉大な聖者たちすべてが、自分の先祖のパーンダヴァ兄弟が主に献愛奉仕をしていたからこそ、かれらに親切だったことを理解しました。ですから王は、自分の生涯の終わりにこの場に居合わせてくれた聖者たちに深く感謝していましたし、それは自分の先祖や祖父たちの偉大さゆえのことであると感じていました。だから、自分がそのような偉大な献愛者たちの子孫であることを誇らしく思っていたのです。主の献愛者が感じるそのような誇りは、まちががなく、物質的な繁栄に対するおごり高ぶった虚栄心と同じではありません。前者は真実であり、いっぽう後者は偽物、あるいは虚栄心です。

第 1 4 節

तस्यैव मेऽघस्य परावरेषो
 व्यासक्तचित्तस्य गृहेष्वभीक्ष्णम् ।
 निर्वेदमूलो द्विजशापरूपो
 यत्र प्रसक्तो भयमाशु धत्ते ॥ १४ ॥

tasyaiva me 'ghasya parāvareśo
vyāsakta-cittasya gr̥heṣv abhikṣṇam
nirveda-mūlo dvija-śāpa-rūpo
yatra prasakto bhayam āśu dhatte

tasya—彼の; *eva*—確かに; *me*—私のもの; *aghasya*—罪深い者の; *parā*—超越的; *avara*—俗な; *iśaḥ*—支配者、至高主; *vyāsakta*—過度に執着して; *cittasya*—心の; *gr̥heṣu*—世帯のことで; *abhikṣṇam*—いつも; *nirveda-mūlaḥ*—無執着の源; *dvija-śāpa*—ブラーフマナによって呪われている; *rūpaḥ*—～の姿; *yatra*—～すると; *prasaktaḥ*—影響を受けた者; *bhayam*—恐怖心; *āśu*—すぐに; *dhatte*—起こる。

超越的・俗的どちらの世界も支配する最高人格主神は、ブラーフマナの呪いという形で慈悲

深く私を攻められた。あまりにも家族生活に心が奪われていた私を救おうと、私に恐怖心を起こさせて物質界から切りはなすために、こうして私のまえに姿を表わされたのだ。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットは、パーンダヴァ家という偉大な献愛者の家系に生まれ、主との交流に対する超越的な執着心を築くための訓練を念入りに受けていたのですが、俗的な家族生活に長く誘惑されていたことに気づき、だからこそ主の計画で、その執着を放棄しなくてはなりません。主は特別の献愛者に対して、このような直接的な行動しめすことがあります。マハーラージャ・パリークシットはこの事実を、宇宙のもっとも高貴な超越主義者たちを見て理解しました。主は献愛者のすぐ横にいますから、偉大な聖者の存在はそのまま主の存在をも示しているのです。だからこそパリークシット王は、至高主の恩寵の証しとして、偉大なリシたちが集結してきたことを歓迎したのでした。

第15節

तं मोपयातं प्रतियन्तु विप्रा
गृणा च देवी धृतचित्तमीशे ।
द्विजोपसृष्टः कुहकस्तक्षको वा
दशत्वलं गायत विष्णुगाथाः ॥ १५ ॥

*tam mopayātam pratiyantu viprā
gaṅgā ca devī dhṛta-cittam īše
dvijopasṛṣṭaḥ kuhakas takṣako vā
daśatv alam gāyata viṣṇu-gāthāḥ*

tam—その理由のために; *mā*—私を; *upayātam*—～に身を委ねて; *pratiyantu*—私を受けいれてください; *viprāḥ*—ブラーフマナ達よ; *gaṅgā*—母なるガンジス川; *ca*—もまた; *devī*—主の直接の代表者; *dhṛta*—～に入れる; *cittam*—心; *īše*—主に; *dvija-upasṛṣṭaḥ*—そのブラーフマナによって作られた; *kuhakaḥ*—ある不可思議なこと; *takṣakaḥ*—スネークバード; *vā*—どちらも; *daśatu*—それが囁むように; *alam*—これ以上遅れることなく; *gāyata*—どうか歌い続けてください; *viṣṇu-gāthāḥ*—ヴィシュヌの行為の話。

お集まりのブラーフマナよ。私を、完全に身をゆだねた魂として受けいれてください。そし

て、主の代理でもある母なるガンジス川も私を受けいれてくださるように。私は自分の心のうちに主の蓮華の御足にすがっているからです。ブラーフマナが作りだしたスネークバードに、あるいは不可思議な存在にすぐに私が嘔み殺されますように。私はみなさんが主ヴィシュヌの崇高な行為を歌いつづけることだけを望んでいます。

要旨解説

至高主の蓮華の御足にすべてを捧げた人は死を恐れませんが。ガンジス川のほとりで主の偉大な献愛者たちによって作られた雰囲気、そしてマハーラージャ・パリークシットが完全に主を受け入れたことは、かれがまちがいなく神のもとに帰っていく証しです。こうしてかれは、死の恐怖から完全に解放されたのでした。

第16節

पुनश्च भूयाद्भगवत्यनन्ते
रतिः प्रस्राश्च तदाश्रयेषु ।
महत्सु यां यामुपयामि सृष्टिं
मैत्र्यस्तु सर्वत्र नमो द्विजेभ्यः ॥ १६ ॥

*punaś ca bhūyād bhagavatya anante
ratiḥ prasraś ca tad-āśrayeṣu
mahatsu yām yām upayāmi sṛṣṭim
maitry astu sarvatra namo dvijebhyaḥ*

punaḥ—再び; *ca*—そして; *bhūyāt*—そうなるように; *bhagavati*—主シュリー・クリシュナに; *anante*—無限の力を持つ者; *ratiḥ*—魅了している; *prasraḥ*—交流; *ca*—もまた; *tat*—主の; *āśrayeṣu*—主の献愛者である者達と; *mahatsu*—物質創造界の中で; *yām yām*—どこでも; *upayāmi*—私が得るかもしれない; *sṛṣṭim*—私の誕生my birth; *maitrī*—friendly relation; *astu*—let it be; *sarvatra*—everywhere; *namaḥ*—my obeisances; *dvijebhyaḥ*—unto the *brāhmaṇas*.

あらためてブラーフマナの皆様に敬意を表し、たとえ私が物質界にふたたび生まれても、主クリシュナへのつきることのない完璧な執着をはぐくみ、主との交流とすべての生命体との親しく結ばれて生まれるように祈ります。

要旨解説

主の献愛者だけが完璧な生命体であることが、この節をとおしてマハーラージャ・パリークシットによって説明されています。献愛者の敵はたくさんいるかもしれませんが、献愛者はだれも敵とは思いません。献愛者は、献愛者ではない人々に対して敵意はないのですが、かれらとのつきあいを望みません。主の献愛者との交流を望んでいるのです。類は友を呼ぶ、と言われているように、それは自然な感情です。そして献愛者にとってもっとも大切な本務は、全生命体の父親である主シュリー・クリシュナに完全な執着心をはぐくむことにあります。優れた息子は、ほかの兄弟たちと親しく接するように、主の献愛者は、至高の父である主クリシュナの優れた息子として、全生命体を至高の父親と結びつけて見つめます。そして尊大になってしまった息子を正気にもどし、神という至高の父を受け入れるよう導きます。マハーラージャ・パリークシットはまちがいなく神のもとに帰っていきませんが、たとえ帰っていかなくても、物質界で完璧な生き方ができるよう祈ります。純粋な献愛者はブラフマーほどの偉大な人物ではなく、主の献愛者でありさえすれば、どれほど卑しい人であってもその人との交流を望みます。

第 17 節

इति स्म राजाध्यवसाययुक्तः
प्राचीनमूलेषु कुशेषु धीरः ।
उदङ्मुखो दक्षिणकूल आस्ते
समुद्रपत्न्याः स्वसुतन्यस्तभारः ॥ १७ ॥

*iti sma rājādhyaśāya-yuktaḥ
prācīna-mūleṣu kuṣeṣu dhīraḥ
udaṅ-mukho dakṣiṇa-kūla āste
samudra-patnyāḥ sva-suta-nyasta-bhāraḥ*

iti—このように; *sma*—過去そうだったように; *rājā*—王; *adhyaśāya*—忍耐心; *yuktaḥ*—従事して; *prācīna*—東側; *mūleṣu*—根と共に; *kuṣeṣu*—クシャの藁でできた席; *dhīraḥ*—self-controlled; *udaṅ-mukhaḥ*—北側を向いている; *dakṣiṇa*—南側に; *kūla*—岸边; *āste*—位置されて; *samudra*—海; *patnyāḥ*—(ガンジス川)の妻; *sva*—own; *suta*—son; *nyasta*—given over; *bhāraḥ*—the charge of administration.

完璧に自己抑制した境地にいたマハーラージャ・パリークシットは、ガンジス川の南側のほとりで、みずからは北を向き、根を東に向けたワラの席に座った。自分の王国はすでに息子にゆずりわたしていた。

要旨解説

ガンジス川は海の妻として世に知られています。クシャの藁の席は、その藁が根といっしょに土から抜かれているものが神聖とされ、その根が東を向く位置がもっとも吉兆とされています。北側を向くのは、精神的成功を得ることでさらには好都合とされています。マハーラージャ・パリークシットは宮殿を出るまえに管理の責任を息子に譲渡しています。こうして、好条件がすべて整った状況に置かれていました。

第18節

एवं च तस्मिन्नरदेवदेवे
प्रायोपविष्टे दिवि देवसङ्घाः ।
प्रशस्य भूमौ व्यकिरन् प्रसूनै-
मुदा मुहुर्दुन्दुभयश्च नेदुः ॥ १८ ॥

*evam ca tasmin nara-deva-deve
prāyopaviṣṭe divi deva-saṅghāḥ
praśasya bhūmau vyakiran prasūnair
mudā muhur dundubhayaś ca neduḥ*

evam—こうして; *ca*—そして; *tasmin*—その中に; *nara-deva-deve*—王に; *prāya-upaviṣṭe*—死ぬまで絶食して; *divi*—空で; *deva*—半神達; *saṅghāḥ*—彼ら全員; *praśasya*—その高位を讃えて; *bhūmau*—地上に; *vyakiran*—まき散らして; *prasūnaiḥ*—花びらで; *mudā*—喜々として; *muhur*—連続的に; *dundubhayaḥ*—天界の太鼓; *ca*—もまた; *neduḥ*—打ち鳴らして。

こうして、マハーラージャ・パリークシット国王は死ぬまで絶食するつもりで座っていた。高位の惑星に住む半神たちはこぞって王のその様子を讃え、喜々として地上に花を降らしつづけ、神聖な太鼓を打ち鳴らすのであった。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットの時代にまでさえ惑星間の交流は行なわれており、マハーラージャ・パリークシットが解放を達成するために死ぬまで絶食をする、という知らせは、知的な半神たちが住んでいる高位の惑星にも伝わりました。半神たちは人間よりも快適に暮らしていますが、そのだれもが至高主の命令に従順です。天界の惑星には、無神論も神を信じない者もいません。ですから、地上にいる主の献愛者はだれでも半神たちに讃えられているのであり、マハーラージャ・パリークシットに対してもかれらはたいそう喜び、地上に花を降らしたり天界の太鼓を打ち鳴らすことで、賞賛のしるしをしめしたのです。半神は、だれかが神のもとに帰るのを見て心から喜びます。主の献愛者を好んでいますから、みずからのアディダイヴィカの力を使って献愛者を全面的に助けようとします。そして主も、かれらのそのような行為を見て喜びます。主、半神、地上の献愛者たちのあいだには、見えない鎖で結ばれた完璧な協力がなされているのです。

第 19 節

महर्षयो वै समुपागता ये
प्रशस्य साध्वित्यनुमोदमानाः ।
ऊचुः प्रजानुग्रहशीलसारा
यदुत्तमश्लोकगुणाभिरूपम् ॥ १९ ॥

*maharṣayo vai samupāgatā ye
praśasya sādhu ity anumodamānāḥ
ūcuḥ prajānugraha-śīla-sārā
yad uttama-śloka-guṇābhirūpam*

maharṣayaḥ—偉大な聖者達; *vai*—当然のこととして; *samupāgatāḥ*—そこに集まって; *ye*—～である者達; *praśasya*—讃えることで; *sādhu*—完全に正しい; *iti*—こうして; *anumodamānāḥ*—誰もが認めている; *ūcuḥ*—言った; *prajā-anugraha*—生命体のために優れたことをしている; *śīla-sārāḥ*—質的に力強い; *yat*—なぜなら; *uttama-śloka*—選りすぐれた詩歌によって讃えられている者; *guṇa-abhirūpam*—神々しい質のように美しい。

集まっていた偉大な聖者たちもこぞってマハーラージャ・パリークシットの決意を、「じつ

にすばらしいことだ」と口々に讃えた。聖者は本来、至高主の優れた質の力をすべてそなえているため、一般庶民のためになることをしたいと考えている。だからこそ、主の献愛者であるマハーラージャ・パリークシットを見て大いに喜び、次のように話しはじめた。

要旨解説

生命体がもともとそなえている美しさは、献愛奉仕の境地でさらに高められます。マハーラージャ・パリークシットは、主クリシュナへの執着に没頭していました。そのようなかれを見て、集まった偉大な聖者たちは心から喜び、「とても素晴らしい」と言って認めました。聖者たちは、本来、一般庶民が幸せになることを考えており、献愛奉仕に高められたマハーラージャ・パリークシットのような人物を見れば、かれらの喜びはたとえようもなく、力のかぎり祝福を授けようとしています。主への献愛奉仕はとても吉兆で、半神たちや聖者たち、そして主までも献愛者に好意をよせますから、献愛者はすべてを吉兆なきもちで見ることができるのです。不吉なことはすべて、努力する献愛者の道からすべて取りのぞかれます。マハーラージャ・パリークシットにとって、これから死のうとするときに偉大な聖者たちに会うのは、じつに吉兆なことであり、こうしてかれはブラーフマナの少年にかけられたいわゆる呪いによって祝福されたのでした。

第20節

न वा इदं राजर्षिवर्य चित्रं
भवत्सु कृष्णं समनुव्रतेषु ।
येऽध्यासनं राजकिरीटजुष्टं
सद्यो जहूर्भगवत्पार्श्वकामाः ॥ २० ॥

na vā idam rājarṣi-varya citram
bhavatsu kṛṣṇam samanuvrateṣu
ye 'dhyāsanam rāja-kirīṭa-juṣṭam
sadyo jahur bhagavat-pārśva-kāmāḥ

na—どちらも～ない; vā—このような; idam—これ; rājarṣi—神聖な王; varya—主要な者; citram—驚くべき; bhavatsu—あなた達すべてに; kṛṣṇam—主クリシュナ; samanuvrateṣu—～の継承に厳格に従っている者に; ye—～である者; adhyāsanam—王座に座って; rāja-kirīṭa—王達の

王冠; *juṣṭam*—飾られて; *sadyaḥ*—すぐに; *jahuh*—放棄した; *bhagavat*—人格主神; *pārśva-kāmāḥ*—交流を達成することを望んでいる。

(聖者たちが言った)。主シュリー・クリシュナの継承に厳格に従うパンドウ家の王たちの筆頭者よ。人格主神との永遠な交流を手に入れるために、多くの王の王冠で飾られた王座をあなたが放棄しても、それはとくに驚くに値することではない。

要旨解説

政治的な行政地位を占める愚かな政治家は、そのはかない地位こそが人生最高の物質的利益と思い、そのため、生涯最期の瞬間にまでその地位にしがみつこうとしています。主の永遠の住居で主の交流者の一人としての解放を達成することが、人生の最高ゴールであることを知らないのです。人間生活はその窮極点を達成するためにあります。主は『バガヴァッド・ギーター』で、神のもとに、主の住居に帰っていくことが最高の達成である、となんども私たちに説いています。プラフラダ・マハーラージャは主ヌリシンハに祈っています——主よ。私は物質主義的な生き方をとても恐れています。そして、ヌリシンハデーヴァという恐ろしく獰猛なお姿に少しも恐怖心を感じません。物質主義的な生活は挽き臼(ひきうす)のようなもので、だれもがその臼で潰されています。私たちは波にもてあそばされる生活のなかで恐ろしい渦巻きに巻きこまれています。ですから主よ、私はあなたの蓮華の御足にもとで祈ります、私をあなたの一召使いとして永遠な住居に呼びもどしてくださるように。それこそ、物質主義的な生活における最高の解放です。私は物質主義的な生活でたとえようもない辛い経験をしています。自分がしたことの結果としてさまざまな生物に生まれるよう強いられ、私は2種類の苦痛を経験してきました。愛する者との別れ、望ましくないものとの遭遇です。その苦痛を取りのぞくために私が選んだ方策は、その病気よりも危険なものでした。ですから私は、誕生と死を繰り返しつつある場所から別の場所に翻弄されてきました。そしていま私は、あなたの蓮華の御足に私が身をゆだねられますよう祈っています」

世界中の大勢の聖者たちよりも尊いパンドヴァ王家の王たちは、物質主義的な生活がもたらす辛さをよく知っています。帝国の王座というまばゆい光に魅了されることなく、主と永遠にふれあえるよう、主に呼ばれる機会をいつも求めていました。マハーラージャ・パリークシットはマハーラージャ・ユディシュティラの優れた孫でした。マハーラージャ・ユディシュティラは孫に皇帝の王座をゆずり、さらにマハーラージャ・パリークシットもその王座を我が子のジャンメージャヤにゆずりました。それが王の生き方です。主クリシュナの継承に厳格に従っているからです。このように主の献愛者は、物質主義的な生活というまばゆい光に心奪われず、

いつわりの、そしてまぼろしの物質主義的生活が作りだす姿に執着することなく、そして公平に生きました。

第 2 1 節

सर्वे वयं तावदिहास्महेऽथ
कलेवरं यावदसौ विहाय ।
लोकं परं विरजस्कं विशोकं
यास्यत्ययं भागवत्प्रधानः ॥ २१ ॥

sarve vyaṁ tāvad ihāsmāhe 'tha
kalevaraṁ yāvad asau vihāya
lokaṁ paraṁ virajaskaṁ viśokaṁ
yāsyaty ayaṁ bhāgavata-pradhānaḥ

sarve—全員; *vyaṁ*—私達の; *tāvat*—～である限り; *iha*—この場所で; *āsmāhe*—留まろう; *atha*—将来; *kalevaram*—その体; *yāvat*—～である限り; *asau*—王; *vihāya*—放棄している; *lokaṁ*—その惑星; *paraṁ*—至高者; *virajaskam*—俗な穢れから完全に自由な; *viśokam*—あらゆる種類の嘆きから自由な; *yāsyati*—戻っていく; *ayaṁ*—これ; *bhāgavata*—献愛者; *pradhānaḥ*—主要な者。

私たちはここで、主の筆頭の献愛者であるマハーラージャ・パリークシットが、俗な穢れも、どのような嘆きもない至高の惑星にもどっていくまで待つつもりでいる。

要旨解説

空に浮かぶ雲にたとえられる物質創造界を超えたところに、ヴァイクンタと呼ばれる無数の惑星が浮かぶ精神界・パラヴヨーマ (*paravyoma*) があります。そのヴァイクンタ惑星は人格主神が住む無数の精神的ローカで、プルショーツタマローカ、アチュタローカ、トゥリヴィクラマローカ、フリシーケーシャローカ、ケーシャヴァローカ、アニルッダローカ、マーダヴァローカ、プラデyumナローカ、サンカルシャナローカ、シュリーダラローカ、ヴァースデーヴァローカ、アヨーチャーローカ、ドウヴァーラカーローカなどの名で知られています。そこに住む生命体はすべて、主と同じ精神的体を持つ解放された魂ばかりです。物質的な穢れもそこにはありません。すべては精神的ですから、嘆くようなこともいっさいありません。超越的な

喜びに満ちあふれ、誕生・死・老年・病気もありません。そしてこれらのヴァイクンタローカの頂点に、主シュリー・クリシュナと特別の交流者たちが住む至上のローカ、すなわちゴーローカ・ヴリンダーヴァナがあります。マハーラージャ・パリークシットはこのローカに到達する定めであり、集まっていた偉大なリシたちはそれが予見できました。かれらはこの偉大なる王の偉大なる他界について話しあい、これほど偉大な献愛者が見られなくなることから、最後の瞬間まで見届けたいと考えていました。偉大な献愛者が他界しても嘆き悲しむ理由はどこにもありません。まちがいなく神の国に入っていくからです。しかしそれでも、悲しみにくれないはずがありません。偉大な献愛者が私たちのまえから姿を消してしまうのですから。主は私たちのいまの目で見るとはほとんどできません——偉大な献愛者にも同じことが言えます。ですから偉大なリシたちは、最後の瞬間までその場にいたい、という正しい決心をしたのです。

第 2 2 節

आश्रुत्य तदृषिगणवचः परीक्षित्
 समं मधुच्युद् गुरु चाव्यलीकम् ।
 आभाषतैनानभिनन्द्य युक्तान्
 शुश्रूषमाणश्चित्तानि विष्णोः ॥ २२ ॥

*āśrutya tad ṛṣi-gaṇa-vacaḥ parikṣit
 samam madhu-cyud guru cāvvalikam
 ābhāṣatainān abhinandya yuktān
 śuśrūṣamāṇaś caritāni viṣṇoḥ*

āśrutya—聞いたすぐあと; *tat*—それ; *ṛṣi-gaṇa*—集まった聖者達; *vacaḥ*—語っている; *parikṣit*—マハーラージャ・パリークシット; *samam*—公平な; *madhu-cyut*—聞いて心地よい; *guru*—厳肅な; *ca*—もまた; *avyalikam*—完璧に真実である; *ābhāṣata*—言った; *enān*—彼ら全員; *abhinandya*—感謝した; *yuktān*—適切に示されて; *śuśrūṣamāṇaḥ*—聞きたいと望んで; *caritāni*—の活動; *viṣṇoḥ*—人格主神。

偉大な聖者たちが口にした言葉はどれも耳に心地よく、深淵な意味がこめられ、完璧な真実として適切にしめされている。マハーラージャ・パリークシットはかれらの言葉を聞き、感謝したあと、主シュリー・クリシュナ、人格主神の活動について聞きたいと思った。

第23節

समागताः सर्वत एव सर्वे
वेदा यथा मूर्तिधरास्त्रिपृष्ठे ।
नेहाथनामुत्र च कश्चनार्थ
ऋते परानुग्रहमात्मशीलम् ॥ २३ ॥

*samāgatāḥ sarvata eva sarve
vedā yathā mūrti-dharās tri-pr̥ṣṭhe
nehātha nāmutra ca kaścanaārtha
ṛte parānugrahaṁ ātma-śīlam*

samāgatāḥ—集まった; *sarvataḥ*—あらゆる方角から; *eva*—確かに; *sarve*—あなた達全員; *vedāḥ*—至高の知識; *yathā*—〜ほどに; *mūrti-dharāḥ*—権化; *tri-pr̥ṣṭhe*—(三界、すなわち上位・中間・下位の世界の上に位置する) ブラフマーの惑星に; *na*—〜ではない; *iha*—この世界で; *atha*—その後; *na*—〜もない; *amutra*—他の世界で; *ca*—もまた; *kaścana*—ほかのどれも; *arthaḥ*—関心; *ṛte*—〜を除いて; *para*—他の人々; *anugrahaṁ*—〜に良いことをしている; *ātma-śīlam*—自分の性質。

王が言った。「偉大なる聖者の皆様。優しいおきもちから、宇宙のさまざまな場所からここにお集まりいただき、ありがとうございました。至高の知識の権化である皆様は、三界を超えた惑星に住んでおられます。ですから、人々のためになることだけを心から望んでおられ、現世であろうと来世であろうと、それ以外に関心をお持ちではありません」

要旨解説

6種類の富、すなわち財産・力・名声・美しさ・知識・放棄心は、絶対人格主神が本来そなえているさまざまな特質です。至高の生物の部分体である私たち生命体は、このような特質を部分的に、上限で78%そなえています。物質界では、この特質（主の特質の78%まで）は、太陽が雲に隠されるように、物質エネルギーによって覆われています。太陽をさえぎっている力は、太陽本来の輝きと比べれば取るに足らない明るさですが、同じように、生命体たちがそなえるその特色はほとんど消えかかっています。天体系には三界があり、下位・中間・上位と分けられます。地球に住む人間は中間の段階の始まりに位置し、ブラフマー、そして同類の生命体はサッチャローカを頂点する上位の世界に住んでいます。サッチャローカに住む住民はヴェ

一ダの知識に精通し、かれらは物質エネルギーを取りはらうことができます。そのためかれらは、ヴェーダの権化として知られています。そして俗的・超越的どちらの知識も完全にそなえているため、俗世界にも超越的な世界にも関心がありません。俗な望みがほとんどない献愛者たちなのです。かれらにとって俗的な世界で得るべきものはありませんし、超越的な世界では完璧な存在として住んでいます。ではなぜ、この俗世界に降りてくるのでしょうか。墮落した魂たちを救うために主の命令に従って、救世主としてさまざまな惑星に降りてくるのです。多様な気候条件にあるさまざまな環境にいる人々を幸せにするために降誕します。かれらには、物質エネルギーに惑わされて物質存在のなかでさまよえる墮落した魂たちを呼びもどすこと以外にすることはなにもありません。

第 2 4 節

ततश्च वः पृच्छ्यमिमं विपृच्छे
 विश्रभ्य विप्रा इतिकृत्यतायाम् ।
 सर्वात्मना म्रियमाणैश्च कृत्यं
 शुद्धं च तत्रामृशताभियुक्ताः ॥ २४ ॥

tataś ca vaḥ pṛcchyaṃ imam vipṛcche
 viśrabhya viprā iti kṛtyatāyām
 sarvātmanā mriyamāṇaiś ca kṛtyam
 śuddham ca tatrāmṛśatābhiyuktāḥ

tataḥ—それなりに; ca—そして; vaḥ—あなた達に; pṛcchyaṃ—尋ねられるべきこと; imam—これ; vipṛcche—お訊きしたい; viśrabhya—信頼できる; viprāḥ—ブラーフマナ達; iti—そのように; kṛtyatāyām—さまざまな義務の中で; sarva-ātmanā—だれにとっても; mriyamāṇaiḥ—特に死のうとしている者達; ca—そして; kṛtyam—忠実な; śuddham—完璧に正しい; ca—そして; tatra—その中に; āmṛśata—完全な熟考によって; abhiyuktāḥ—まさにふさわしい。

信頼に値するブラーフマナたちよ。皆様にお訊きしたいのは、いま私がなにをすべきか、ということ。どうかよく熟考されたうえで、どのような状況下でも、だれにとっても、とりわけ死を目前にした者がなすべき真の義務についてお話してください。

要旨解説

この節で、王は博識な聖者たちに2つの質問をしています。最初は、どのような状況下であっても、そしてだれもがはたすべき義務、2番目はまもなく死のうとする人の義務です。この2つの条件のなかでも、死にかけている人にかかわる質問がもっとも切実です。すぐであろうと、あるいは100年後であろうと、だれもが死にかけているからです。何年生きるのかはそれほど問題ではありませんが、死にかけている人の義務はひじょうに重要です。マハーラージャ・パリークシットは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーがこの場所に現われるまえに、この2つの質問をしています。じつは『シュリーマド・バーガヴァタム』全体の話題は第2編から第12編まで、この2つの質問に関連があります。その結論として辿りつくのは、主シュリー・クリシュナへの献愛奉仕であり、主みずから『バガヴァッド・ギーター』のなかで、すべての人々の永遠の義務に関連して確証しているとおりで。マハーラージャ・パリークシットはすでにこの答がわかっていたのですが、集まっている偉大な聖者たち全員にそのことを確証してほしい、そうすれば議論の余地なく、自分の義務がはたせると考えたからです。かれはここで *śuddha* (シュッダ)、完璧に正しい、という言葉を使っています。超越的な悟り、あるいは自己の悟りのために、数多くの方法がさまざまな段階にいる哲学者によって勧められています。一流の方法もあれば、二流、あるいは三流の方法もあるでしょう。一流の方法とは、他の方法をすべて捨てて主の蓮華の御足に身をゆだねることであり、そうすればすべての罪とその反動から救われるのです。

第25節

तत्राभवद्भगवान् व्यासपुत्रो
यदृच्छया गामटमानोऽनपेक्षः ।
अलक्ष्यलिङ्गो निजलाभतुष्टो
वृत्तश्च बालैरवधृतवेषः ॥ २५ ॥

tatrābhavad bhagavān vyāsa-putro
yadṛcchayā gām aṭamāno 'napekṣaḥ
alakṣya-liṅgo nija-lābha-tuṣṭo
vṛtaś ca bālair avadhṛta-veśaḥ

tatra—そこに; *abhavat*—現われた; *bhagavān*—力強い; *vyāsa-putraḥ*—ヴァーサデーヴァの子;

yadṛcchayā—人が望むように; gām—地球; aṭamānaḥ—旅している間; anapekṣaḥ—無関心; alakṣya—表わしていない; liṅgaḥ—兆し; nija-lābha—自己を悟った; tuṣṭaḥ—満足して; vṛtaḥ—囲まれて; ca—そして; bālaiḥ—子ども達によって; avadhūta—他人に無視されて; veśaḥ—着ている。

そのとき、ヴァーサデーヴァの力強い子息がその場に姿を表わした。諸国を流浪していたかれは、なにかに関心をよせることもなく、みずからの内で満たされ、どの社会階級や身分にも属さない風貌を漂わせている。女性や子どもたちに囲まれ、その存在が衆人に無視されているような出で立ちで歩いていた。

要旨解説

バガヴァーン (bhagavān) という言葉は、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーという主の偉大な献愛者たちと結びつけて使われることがあります。解放されたそのような魂たちは、物質界でなにが起ころうと頓着しません。献愛奉仕という最高の境地で満たされているからです。先に説明されましたが、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは正式に精神指導者を受け入れたことも、正式な浄化儀式を受けたこともありません。父、ヴァーサデーヴァから『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞いたことで、父が自然に精神指導者になりました。その過程をとおり、完全に自己のうちで満たされた境地に入りました。なにか特定の方法に従っていたわけではありません。完璧な解放に辿りつこうとする人々には特定の方法が必要になりますが、シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは父の恩寵を授かったことで、すでにその境地に入っていました。若い男性にふさわしい適切な衣服を着るべきところですが、周囲には目もくれず裸でさまよっていました。衆人に無視され、狂人のように歩くかれを、子どもや女性たちがおもしろがって囲んで一緒に歩くのです。こうして気のむくままに流浪していたはてに、この場に現われたのです。偉大な聖者たちは、マハーラージャ・パリークシットの質問に対して一致した最終判断は出していなかったようです。精神的解放に関しては、さまざまな人物が多種多様な規定を説いています。しかしやはり、人生の窮極目標は、主への献愛奉仕という最高完成境地に辿りつくことです。医者によって対応が違うように、聖者たちにもさまざまな規定がありました。そのような状況に登場したのが、ヴァーサデーヴァの力強い子息だったのです。

第26節

तं द्व्यष्टवर्षं सुकुमारपाद-
करोरुबाह्वंसकपोलगात्रम् ।

चार्वीयताक्षोन्नसतुत्यकर्ण-
सुर्भवाननं कम्बुसुजातकण्ठम् ॥ २६ ॥

*tam dvyaṣṭa-varṣam su-kumāra-pāda-
karoru-bāhv-aṁsa-kapola-gātram
cārv-āyatākṣonnasa-tulya-karṇa-
subhrv-ānanam kambu-sujāta-kaṇṭham*

tam—彼を; *dvi-aṣṭa*—16; *varṣam*—歳; *su-kumāra*—繊細な; *pāda*—足; *kara*—手; *ūru*—腿; *bāhu*—腕; *aṁsa*—肩; *kapola*—額; *gātram*—体; *cāru*—美しい; *āyata*—広い; *akṣa*—目; *unnasa*—高い鼻; *tulya*—同じ; *karṇa*—耳; *subhrv*—秀でた眉; *ānanam*—顔; *kambu*—巻き貝; *sujāta*—美しく作られて; *kaṇṭham*—首。

ヴァーサデーヴァのこの子息は弱冠16歳である。その足、手、腿、腕、肩、額、体のほかの部分は何れも見目麗しく形づくられている。目は大きく美しく、鼻と耳は高い。顔立ちはこのうえなく美しく、形のいい首はさながら美しい巻き貝を思いおこさせる。

要旨解説

貴人の容貌を描写するときはずから説明されますが、この節でも、その誉れ高い表現法がシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーについて使われています。かれはまだ16歳になったばかりでした。人物像は、高齢ではなく功績で決まるもの。人は年齢ではなく経験で歳をとるものです。シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはここでヴァーサデーヴァの子息、と描写されており、この場に居合わせた聖者全員よりも経験豊かな知識をそなえていました。弱冠16歳の青年だったのですが。

第27節

निगूढजन्तुं पृथुतुरावक्षस-
मावर्तनाभिं वलिवल्गूदरं च ।
दिगम्बरं वक्रविकीर्णकेशं
प्रलम्बबाहुं स्वमरोत्तमाभम् ॥ २७ ॥

nigūḍha-jatrum pṛthu-tuṅga-vakṣasam
āvarta-nābhim vali-valgūdaram ca
dig-ambaram vaktra-vikīrṇa-keśam
pralamba-bāhum svamarottamābham

nigūḍha—包まれて; jatrum—鎖骨; pṛthu—広い; tuṅga—隆起して; vakṣasam—胸; āvarta—渦巻いて; nābhim—臍; vali-valgu—線が刻まれて; udaram—腹部; ca—also; dik-ambaram—dressed by all directions (naked); vaktra—curled; vikīrṇa—scattered; keśam—hair; pralamba—elongated; bāhum—hands; su-amara-uttama—the best among the gods (Kṛṣṇa); ābham—hue.

鎖骨はたくましく、胸は広く厚く、臍は深くくぼみ、腹部には美しい線が刻まれている。腕は長く、長い巻き毛がその美しい顔にかかっている。一糸もまとわず、その体の色は、主クリシュナの肌を彷彿とさせる。

要旨解説

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの描写からは、その容姿がふつうの男性とは異なることがよくわかります。その容姿の描写は、人相学にもとづいた典型的な偉人に共通する非凡な姿を表わしています。体の色は、神々、半神、そして全生命体の頂点にいる主クリシュナの肌の色を彷彿とさせるのです。

第 28 節

श्यामं सदापिव्यवयोऽरालक्ष्म्या
स्त्रीणां मनोज्ञं रुचिरस्मितेन ।
प्रत्युत्थितास्ते मुनयः स्वासनेभ्य-
स्तलक्षणज्ञा अपि गूढवर्चसम् ॥ २८ ॥

śyāmam sadāpīvyā-vayo-'ṅga-lakṣmyā
strīṇāṃ mano-jñam rucira-smitena
pratyutthitās te munayaḥ svāsanebhyas
tal-lakṣaṇa-jñā api gūḍha-varcasam

śyāmam—黒っぽい; sadā—いつも; apīvyā—過度に; vayaḥ—歳; aṅga—兆し; lakṣmyā—～とい

う富によって; *strīṇām*—美貌の; *manaḥ-jñam*—魅力的な; *rucira*—美しい; *smitena*—微笑んでいる; *pratyutthitāḥ*—立ち上がった; *te*—彼ら全員; *munayaḥ*—偉大な聖者達; *sva*—自分の; *āsanebhyaḥ*—席から; *tat*—それら; *lakṣaṇa-jñāḥ*—人相学に精通している; *api*—～でさえ; *gūḍha-varcasam*—覆われた栄光。

その肌は黒みがかり、みずみずしい美しさで輝いている。魅力的な容姿とうっとりさせる微笑みが、女性の心を惹きつけてやまない。自然ににじみ出る栄光を隠そうとするシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーだったが、人相学に精通していた偉大な聖者たちは全員立ちあがり、かれを讃えるのであった。

第 29 節

स विष्णुरातोऽतिथय आगताय
तस्मै सपर्यां शिरसाजहार ।
ततो निवृत्ता ह्यबुधाः स्त्रियोऽर्भका
महासने सोपविवेश पूजितः ॥ २९ ॥

sa viṣṇu-rāto 'tithaya āgatāya
tasmai saparyām śirasājahāra
tato nivṛttā hy abudhāḥ striyo 'rbhakā
mahāsane sopaviveśa pūjitaḥ

saḥ—彼; *viṣṇu-rātaḥ*—(主ヴィシュヌにいつも守られている) マハーラージャ・パリークシット; *atithaye*—客人になること; *āgatāya*—そこに到着した者; *tasmai*—彼に; *saparyām*—全身で; *śirasā*—下げた頭で; *ājahāra*—お辞儀を捧げた; *tataḥ*—その後; *nivṛttāḥ*—やめた; *hi*—確かに; *abudhāḥ*—知性の足りない; *striyaḥ*—女性達; *arbhakāḥ*—少年達; *mahā-āsane*—高座; *sa*—彼; *upaviveśa*—座った; *pūjitaḥ*—尊ばれて。

ヴィシュヌラータ(つねにヴィシュヌに守られている者)という名でも知られるマハーラージャ・パリークシットは、頭を深々と下げて主賓のシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーを迎えた。このときになって、なにも知らない女性や少年たちは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの跡についていくのをやめた。居合わせた全員の敬意を受け入れたかれは、用意された高座に座った。

要旨解説

その集まりにシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが到着したことで、シュリーラ・ヴァーサデーヴァとナーラダ、その他数人を除く全員が立ちあがり、主の偉大な献愛者を迎えたことを喜んだマハーラージャ・パリークシットは、ひれ伏して全身で歓迎のきもちを表わしました。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーも心からの歓迎に応え、抱擁し、手をにぎり、うなずき、そしてとくに父とナーラダ・ムニのまえにひれ伏したあと、主賓席を勧められました。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーがパリークシット王と聖者たちにこうして迎えられたとき、それまでついできた町の少年や知性の足りない女性たちは、驚き、おじけづきました。そしてかれらがそれまでの軽薄な行為をやめたあと、あたりは厳粛で静寂な雰囲気になりました。

第30節

स संवृतस्तत्र महान् महीयसां
ब्रह्मर्षिराजर्षिदेवर्षिसङ्घैः ।
व्यरोचतालं भगवान् यथेन्दु-
ग्रहर्क्षतारानिकरैः परीतः ॥ ३० ॥

sa saṁvṛtas tatra mahān mahīyasām
brahmarṣi-rājarṣi-devarṣi-saṅghaiḥ
vyarocatālam bhagavān yathendur
graharkṣa-tārā-nikaraiḥ parītaḥ

saḥ—シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー; saṁvṛtaḥ—～に囲まれて; tatra—そこに; mahān—偉大な; mahīyasām—もっとも偉大な者の; brahmarṣi—ブラーフマナのなかの聖者; rājarṣi—王のなかの聖者; devarṣi—半神達のなかの聖者; saṅghaiḥ—～の集まりによって; vyarocata—適切に報われて; alam—有能な; bhagavān—力強い; yathā—～のように; induḥ—月; graha—惑星; ṛkṣa—天体; tārā—星々; nikaraiḥ—～の集まりによって; parītaḥ—～に囲まれて。

つぎにシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは神聖な聖者や半神たちに囲まれた。その様は、月が星々、惑星、天体に囲まれているかのように見える。華麗なその存在がきわだち、あらゆる人々の敬意を一身に受けていた。

要旨解説

神聖な人物の集まりのなかには、ブラフマルシのヴァーサデーヴァ、デーヴァルシのナーラダ、クシャトリア王のなかの偉大な統治者であるパラシュラーマたちがいました。主の力強い化身の顔もありました。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはブラフマルシ、ラージャルシ、デーヴァルシなどの名で呼ばれることはありませんし、またナーラダ、ヴァーサ、パラシュラーマのような化身でもありませんでした。それでも、向けられた敬意はかれらを凌ぐほどでした。これは、この世界にいる主の献愛者は主自身よりも敬われるということを表わしています。ですから私たちは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような献愛者の重要性を過小評価するようなことがあってはなりません。

第31節

प्रशान्तमासीनमकुण्ठमेधसं
मुनिं नृपो भागवतोऽभ्युपेत्य ।
प्रणम्य मूर्ध्नावहितः कृताञ्जलि-
र्नत्वा गिरा सूनृतयान्वपृच्छत् ॥ ३१ ॥

*praśāntam āsīnam akuṇṭha-medhasam
munim nṛpo bhāgavato 'bhyupetya
praṇamya mūrdhnāvahitaḥ kṛtāñjalir
natvā girā sūnṛtayānvapṛcchat*

praśāntam—完璧に穏やかな; *āsīnam*—座っている; *akuṇṭha*—躊躇することなく; *medhasam*—十分な知性を持つ者; *munim*—偉大な聖者に; *nṛpaḥ*—王 (マハーラージャ・パリークシット); *bhāgavataḥ*—偉大な献愛者; *abhyupetya*—彼に近づいている; *praṇamya*—ひれ伏している; *mūrdhnā*—彼の頭; *avahitaḥ*—適切に; *kṛta-añjaliḥ*—合掌して; *natvā*—丁重に; *girā*—言葉で; *sūnṛtayā*—優雅な声で; *anvapṛcchat*—尋ねた。

聖者シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは泰然と座り、知性に満ち、なに訊かれてもよどみなく答えるつもりでいた。そこへ偉大な献愛者・マハーラージャ・パリークシットが歩み寄り、ひれ伏して敬意を表し、合掌しながら風雅な言葉で尋ねた。

要旨解説

師に尋ねるためにとったマハーラージャ・パリークシットのふるまいは、経典の教えに沿っています。経典は、超越的科学を悟るにはつつましく精神指導者に近づくように、と教えています。いまマハーラージャ・パリークシットは死ぬ準備をしており、7日という短いあいだに神の国に入る方法を学ぶ必要に迫られています。これほどせっぱつまった状況に置かれた人こそ、精神指導者に近づくべきなのです。人生の問題を解決するつもりでなければ、精神指導者に救いを求める必要はありません。どうやって師に尋ねたらいいのか知らない人に、師に会う必要があるのでしょうか。精神指導者の資格は、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーという人物によって完璧にしめされています。精神指導者と弟子、すなわちシュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとマハーラージャ・パリークシットは、『シュリーマド・バーガヴァタム』という媒体をとおして完成の境地を達成しました。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは父であるヴァーサデーヴァから『シュリーマド・バーガヴァタム』を学びましたが、それを朗唱する機会がありませんでした。マハーラージャ・パリークシットのまえで『シュリーマド・バーガヴァタム』を朗唱し、マハーラージャ・パリークシットの質問によどみなく答えることで、精神指導者と弟子は解放を達成したのです。

第32節

परीक्षिदुवाच

अहो अद्य वयं ब्रह्मन् सत्सेव्याः क्षत्रबन्धवः ।

कृपयातिथिरूपेण भवद्विस्तीर्थकाः कृताः ॥ ३२ ॥

parikṣid uvāca

aho adya vyaṁ brahman

sat-sevyāḥ kṣatra-bandhavaḥ

kṛpayātithi-rūpeṇa

bhavadbhis tīrthakāḥ kṛtāḥ

parikṣit uvāca—幸運なマハーラージャ・パリークシットが言った; *aho*—おお; *adya*—今日; *vayam*—私達; *brahman*—おおブラーフマナよ; *sat-sevyāḥ*—献愛者に仕えることができる; *kṣatra*—支配階級; *bandhavaḥ*—友人達; *kṛpayā*—あなたの慈悲によって; *atithi-rūpeṇa*—来賓のよ
うに; *bhavadbhiḥ*—あなたによって; *tīrthakāḥ*—巡礼地としてふさわしい; *kṛtāḥ*—あなたによ
つて為されて。

幸運なパリークシットが言う。「ブラーフマナよ。ここに私の来賓として来ていただき、ただあなたの慈悲心から、私たちをあたかも巡礼地のように清めてくださいました。その慈悲ゆえに、なんの価値もない私たち王族が、献愛者に仕えることができるようになるのです」

要旨解説

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような神聖な献愛者は、とくに王家の階級のような、世を楽しもうとする者たちに近づこうとはしません。マハーラージャ・プラターパルドラは主チャイタンニヤの従者でしたが、主に会いたいと思ったとき、王だったかれに主は会いませんでした。神のもとに帰りたいと願う献愛者に、2つのことがきびしく禁じられています。俗的な享樂者と女性との交わりです。ですから、模範的な献愛者であるシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、国王に会うことに関心はありません。もちろん、マハーラージャ・パリークシットの場合は事情が異なります。王ではあっても偉大な献愛者ですから、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、かれが最期を迎えようとしていたときに会いに来たのです。マハーラージャ・パリークシットは先代の王に匹敵する偉大な王ではあったのですが、献愛者としての謙虚な思いから、自分は偉大なクシャトリヤの先祖にはどうも及ばない無価値な子孫であると感じていました。王族ではあってもその資格のない息子をクシャトウラ・バンドヴァ (*kṣatra-bandhava*)、ブラーフマナの無価値な息子をドウヴィジャ・バンドウ、あるいはブラフマ・バンドウといいます。マハーラージャ・パリークシットはシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーといることに大いに勇気づけられました。いるだけで巡礼地を神聖化する偉大な聖者が目のまえにして、自分が浄化されたと感じたのです。

第33節

येषां संस्मरणात् पुंसां सद्यः शुद्ध्यन्ति वै गृहाः ।
किं पुनर्दर्शनस्पर्शपादशौचासनादिभिः ॥ ३३ ॥

*yeṣāṃ saṁsmaraṇāt puṁsāṃ
sadyaḥ śuddhyanti vai gṛhāḥ
kiṁ punar darśana-sparśa-
pāda-śaucāsanādibhiḥ*

yeṣāṃ—～である者の; *saṁsmaraṇāt*—思いおこすことで; *puṁsāṃ*—人物の; *sadyaḥ*—すぐに;

suddhyanti—浄化する; *vai*—確かに; *gr̥hāḥ*—すべての家; *kim*—何; *punaḥ*—ならば; *darśana*—会っている; *sparsa*—触れている; *pāda*—足; *śauca*—洗っている; *āsana-ādibhiḥ*—席を勧めるなど。

あなたを思うだけで、私たちの家は神聖化されます。ならばあなたを見る、あなたに触れる、あなたの聖なる御足を洗う、そして家に招いて席をお勧めする結果は言うまでもありません。

要旨解説

神聖な巡礼地の重要性は、そこに偉大な聖者や聖人が住んでいるという点にあります。罪な人々が聖地を訪れ、自分たちの罪をそこに残して帰り、結果としてその罪が積まれていく——とされています。しかしそこに住む偉大な聖者によって罪が消毒され、その聖地は、かれらの力でいつでも純粋な状態でありつづけます。もしも聖者が一般人の家を訪ねれば、俗な享樂者が作りだした罪も中和されていきます。ですから、聖なる人物は世帯者に関心があって訪ねてくるわけではありません。その家を神聖にするためだけに来るのですから、感謝しながら聖者を迎えなくてはなりません。聖者の名誉を傷つける世帯者はたいへんな冒瀆者と言えるでしょう。ですから、神聖な人物にひれ伏さない世帯者は、その日は絶食し、その大きな冒瀆を消さなくてはならない、と教えられています。

第34節

सान्निध्यात्ते महायोगिन्यात्कानि महान्त्यपि ।
सद्यो नश्यन्ति वै पुंसां विष्णोरिव सुरेतराः ॥ ३४ ॥

sānnidhyāt te mahā-yogin
pātakāni mahānty api
sadyo naśyanti vai puṁsām
viṣṇor iva suretarāḥ

sānnidhyāt—その存在のために; *te*—あなたの; *mahā-yogin*—偉大な神秘家よ; *pātakāni*—罪; *mahānti*—難攻不落の; *api*—~にもかかわらず; *sadyaḥ*—すぐに; *naśyanti*—克服される; *vai*—確かに; *puṁsām*—人の; *viṣṇoḥ*—人格主神の存在のような; *iva*—~のように; *sura-itarāḥ*—半神達以外に。

聖者よ、偉大なる神秘家よ！ 無神論者が人格主神のいるところにいつづけられないように、

人間が犯す難攻不落の罪は、あなたの存在によってたちどころに克服することができます。

要旨解説

人間は、無神論者と主の献愛者という2種類に分けられます。主の献愛者は神聖な質を表わしていることから、半神と呼ばれていますが、いっぽう無神論者を悪魔といいます。悪魔はヴェイシュヌ、人格主神のいるところは耐えられません。かれらはいつも人格主神を負かそうとしているのですが、じっさいは、主の名前、特質、崇高な娯楽、主にかかわるもの、多様性などという形で人格主神が姿を見せれば、かれらのほうがすぐに克服されます。幽霊は主の聖なる名前が唱えられている場所にはいられない、と言われていています。偉大な聖者と主の献愛者は、「主にかかわるもの」のリストに入っており、神聖な献愛者がいるところは、幽霊のような罪はすぐに姿を消します。それが全ヴェーダ経典の意見です。だからこそ神聖な献愛者とふれあうことだけが勧められているのであり、それができれば、この世の悪魔も幽霊も、不吉な力を発揮することはできません。

第35節

अपि मे भगवान् प्रीतः कृष्णः पाण्डुसुतप्रियः ।
पैतृष्वसेयप्रीत्यर्थं तद्गोत्रस्यात्तबान्धवः ॥ ३५ ॥

*api me bhagavān prītaḥ
kṛṣṇaḥ pāṇḍu-suta-priyaḥ
paitṛ-ṣvaseya-prīty-artham
tad-gotrasyātta-bāndhavaḥ*

api—明確に; *me*—私に; *bhagavān*—人格主神; *prītaḥ*—喜ばせた; *kṛṣṇaḥ*—主; *pāṇḍu-suta*—パ
ーンドウ王の子息達; *priyaḥ*—愛しい; *paitṛ*—父親との関係において; *svaseya*—妹の子息達; *prīti*—満足; *artham*—〜について; *tat*—彼らの; *gotrasya*—その子孫の; *ātta*—受けいれた;
bāndhavaḥ—友人として。

パーンドウ王の子息たちが心から愛する主クリシュナ・人格主神は、私を親族の一人として受けいれてくださった。ご自分の従兄弟や兄弟を喜ばせたい一心で。

要旨解説

主の純粹かつ無二の献愛者は、幻想でしかない家族に執着している一般人よりも巧みに家族に仕えます。だれもが家族に執着しており、人類が経済発展を目指す衝動は、この家族への愛着に支えられています。惑わされたそのような人々は、主の献愛者になったほうが家族によりよい奉仕ができることを知りません。主は献愛者の家族と子孫を特別に守ります——その家族が献愛者ではないとしても！ マハーラージャ・プラフラダは主の偉大な献愛者でしたが、父ヒラニヤカシプはたいへんな無神論で、みずから主の敵と宣言した男でした。それでも、マハーラージャ・プラフラダの父親だったために解放されました。主は親切な方ですから、献愛者の家族をぜったいに守ろうとし、こうして献愛者は、献愛奉仕をするために家族のもとを離れても心配する必要がなくなります。マハーラージャ・ユディシュティラとその兄弟たちは、主クリシュナの叔母であるクンティーの子息で、パリークシット王は、自分がその偉大なパーンダヴァ兄弟のただ一人の孫だからこそ、主クリシュナに寵愛されていることを認めています。

第36節

अन्यथा तेऽव्यक्तगतेर्दर्शनं नः कथं नृणाम् ।
नितरां म्रियमाणानां संसिद्धस्य वनीयसः ॥ ३६ ॥

anyathā te 'vyakta-gateḥ
darśanam naḥ katham nṛṇām
nitarām mriyamāṇānām
saṁsiddhasya vanīyasaḥ

anyathā—そうでなければ; te—あなたの; avyakta-gateḥ—動きが見えない人の; darśanam—会っている; naḥ—私のために; katham—どうやって; nṛṇām—人々の; nitarām—特に; mriyamāṇānām—死のうとしている人々の; saṁsiddhasya—完全に完璧な人物の; vanīyasaḥ—自発的な現われ。

そうでなければ（主クリシュナの導きがなければ）、だれにも知られることなく移動し、また死の淵にいる私たちに見られることのないあなたが、みずから進んでここに集まられることがあるでしょうか。

要旨解説

まちがいなく言えるのは、偉大な聖者シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、偉大な献愛者であるマハーラージャ・パリークシットのまえに現われ、そして『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えを伝えるために、主クリシュナに導かれたということです。精神指導者と人格主神の慈悲を授かれれば、主への献愛奉仕の核心を得ることができます。精神指導者は、私たちが窮極の成功を得られるよう主によって遣わされた、そして姿となって表わされた代表者です。主に権威づけられていない人は精神指導者にはなれません。シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは正しく認められた精神指導者であり、だからこそマハーラージャ・パリークシットのまえに現われ、『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えを伝えるよう主から導かれました。主が遣わした真実の代表者から恩寵を授かれれば、神のもとに帰るという窮極の成功も授かります。主の真実の代表者に出会った献愛者は、いまの体を去ったあとにまちがいなく神のもとに帰ることができます。しかしこれは、献愛者自身の真剣さにかかっています。主は全生命体の心臓のなかに座っており、すべての個々の人がどう行動しているのかをよく知っています。ある魂が神のもとに帰りたく強く願っていることを知ると、主はすぐに真の代表者を送ります。こうして主によって、誠実な献愛者は神のもとに帰ることが保証されるのです。結論として、精神指導者の支えや助けを得ている人は主自身からじかに助けてもらっている、と言えます。

第37節

अतः पृच्छामि संसिद्धिं योगिनां परमं गुरुम् ।
पुरुषस्येह यत्कार्यं प्रियमाणस्य सर्वथा ॥ ३७ ॥

*ataḥ pṛcchāmi saṁsiddhim
yogināṁ paramaṁ gurum
puruṣasyeha yat kāryaṁ
mriyamāṇasya sarvathā*

ataḥ—ですから; *pṛcchāmi*—懇願する; *saṁsiddhim*—完成への道; *yoginām*—聖者達の; *paramam*—至高者; *gurum*—精神指導者; *puruṣasya*—人物の; *iha*—現世で; *yat*—何でも; *kāryam*—義務; *mriyamāṇasya*—死のうとしている者の; *sarvathā*—あらゆる意味で。

あなたは偉大な聖者や献愛者たちの精神指導者です。ですから、だれにとっても、とくに死のうとしている者にとって完璧な道をしめしてくださるよう乞い願います。

要旨解説

ほんとうに完成の道をきわめたいと思っていなければ、精神指導者に近づく必要はどこにもありません。精神指導者は世帯者の飾り物ではないのですから。ふつう、流行にふりまわされる物質主義者は、名ばかりの精神指導者に仕えてもなんの利益も得ていません。にせもの精神指導者はいわゆる弟子たちの機嫌をうかがい、その結果、師と従者はどちらもまちががなく地獄に行きます。マハーラージャ・パリークシットは正しい弟子です。関心を抱くすべての人にとって、とくに死にかけている人にとって重要な質問をしているからです。マハーラージャ・パリークシットが口にした質問は、『シュリーマド・バーガヴァタム』の完璧な理論の基本原則です。では、偉大な師がこれからどのように知的に答えるかを見守りましょう。

第38節

यच्छ्रोतव्यमथो जप्यं यत्कर्तव्यं नृभिः प्रभो ।
स्मर्तव्यं भजनीयं वा ब्रूहि यद्वा विपर्ययम् ॥ ३८ ॥

*yac chrotavyam atho japyam
yat kartavyam nṛbhiḥ prabho
smartavyam bhajanīyam vā
brūhi yad vā viparyayam*

yat—何でも; *śrotavyam*—聞くに値する; *atho*—それについて; *japyam*—唱えた; *yat*—～であるものも; *kartavyam*—実行した; *nṛbhiḥ*—一般大衆によって; *prabho*—おお師よ; *smartavyam*—思いおこされるべきもの; *bhajanīyam*—崇拝できる; *vā*—どちらも; *brūhi*—どうか説明してください; *yad vā*—～かもしれないもの; *viparyayam*—その原則に反する物事。

どうかお教えください。人はなにを聞き、唱え、思いだし、崇拝すべきかを、そしてなにをすべきではないかを。どうかこのことを私に説明してください。

第39節

नूनं भगवतो ब्रह्मन् गृहेषु गृहमेधिनाम् ।
न लक्ष्यते ह्यवस्थानमपि गोदोहनं क्वचित् ॥ ३९ ॥

*nūnaṁ bhagavato brahman
gṛheṣu gṛha-medhinām
na lakṣyate hy avasthānam
api go-dohanam kvacit*

nūnam—なぜなら; *bhagavataḥ*—非常に力強いあなたの; *brahman*—おおブラーフマナよ; *gṛheṣu*—その家に; *gṛha-medhinām*—世帯者達の; *na*—～ではない; *lakṣyate*—見られる; *hi*—確かに; *avasthānam*—～に留まる; *api*—～でさえ; *go-dohanam*—乳牛の乳を搾っている; *kvacit*—希に。

力強きブラーフマナよ。あなたは、乳牛の乳を搾るに必要な時間だけしか世帯者の家にとどまらない、とされています。

要旨解説

放棄階級の神聖な聖人や聖者たちは、早朝、世帯者が牛のミルクを搾るときにその家を訪ね、生きていくためだけに牛乳を乞います。乳牛の乳房から得られる500ミリリットル程度の牛乳は、大人に必要なビタミンが充分含まれています。たいへん貧しい世帯者でも最低10頭の牛を飼い、それぞれが10～20リットルぐらゐの牛乳を出しますから、托鉢僧がきて牛乳を乞うてもためらうことなく差しだします。世帯者は、自分の子どものように聖人や聖者を養うのが義務です。ですから、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような聖者は、早朝、世帯者の家を訪ねても5分以上とどまることはありません。言いかえると、そのような聖者が世帯者の家にとどまっている様子はめったに見られないということであり、ですから、マハーラージャ・パリークシットは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーにできるだけ速く教えを授けるよう祈りをささげているのです。世帯者はまた、訪ねてきた聖者から超越的な情報を授かるほどの知性を持たなくてはなりません。市場で手に入るようなものを聖者にせがむのはじつに愚かなことです。聖者と世帯者の関係はそうあるべきです。

第40節

सूत उवाच

एवमाभाषितः पृष्ठः स राज्ञा श्लक्ष्णया गिरा ।
प्रत्यभाषत धर्मज्ञो भगवान् बादरायणिः ॥ ४० ॥

sūta uvāca

evam ābhāṣitaḥ pṛṣṭaḥ

sa rājñā ślakṣṇayā girā

pratyabhāṣata dharma-jñō

bhagavān bādarāyaṇiḥ

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *evam*—このように; *ābhāṣitaḥ*—語って; *pṛṣṭaḥ*—そして~を尋ねた; *saḥ*—彼; *rājñā*—王によって; *ślakṣṇayā*—心地よさによって; *girā*—言葉; *pratyabhāṣata*—答え始めた; *dharma-jñāḥ*—宗教原則を知る者; *bhagavān*—力強い人物; *bādarāyaṇiḥ*—ヴァーサデーヴァの息子。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「パリークシット王は、心地よい言葉を使って聖者にこのように話し、尋ねた。それに対し、宗教原則を知り、偉大かつ力強い人物であるヴァーサデーヴァの子息が答えていった」

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第19章、「シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの降誕」の要旨解説を終了します。